

円了旅行記にみる月の描写・記述 について

堀 雅通

hori masamichi

1. はじめに

古来、日本人は月見を好んだ。東洋大学創立者・井上円了（以下「円了」）も観月を趣味とした。その生涯、国内外、実に多くの旅行をした円了だが、旅先では折に触れ、月の形状・様相、感想・感慨等を旅行記に記している。「夜に入れば新月天に懸かる。その形、鎌の如し」(23・288)。「日沈みてなほ残紅を留め、弦月すでに天空に現れ、風光描くが如し」(12・383)。全国巡回講演（巡講）で群馬県を訪れた折も「渡橋して桃野村字月夜野に入る。地名すこぶる雅なり」(15・220)と感じ入った(1)。

幼い頃より円了は月を見る習慣があった（と考える）。物心ついてからは月を題材に漢詩を詠んだ。こうした月に対する思い・関心は、寺で育った環境や月見といった慣習にもよるだろうが、感性の鋭かった円了の個性によるところが大きいと考える。ともあれ、円了は幼少時より月の美しさに惹かれていた(2)。

本論は、そのような円了の月に対する思い、及び後年執筆された旅行記における月の描写・記述について分析し、円了にとって、それがどのような意味をもっていたかを考察する(3)。換言すれば、円了は、なぜ旅行記に月の描写・記述を入れたのか。その理由を明らかにする。

円了旅行記ないし著作については多くの研究があるが、月との関係に

ついて言及したものはない。しかし、本論は、円了が若いころから一貫して漢詩、旅行記等に月の形状・様相、あるいは月への思いを記していることに着目、円了と月、さらに旅との関係について考察を加えたものである。

本論では、まず円了旅行記にみる月の描写・記述を抽出し、その表現・内容を分類する。いつ月を見たのか。どこで見たのか。どのような月(形状、位相、様相等)を見たのか検証する。またそのような月をどのように描写・記述、すなわち表現したか。さらに、月(を見ること)に何を感じ、何を見出したか。特に旅との関係において、それがどのような意味をもっていたかを明らかにする。

2. 『漫遊記』にみる月—清風涼月、幽趣限りなし

月の描写・記述が初出する旅行記は『漫遊記』である。『漫遊記』は、円了の学生(東京大学予備門・東京大学)時代(明治10年7月8日～明治18年8月31日)に執筆された自筆の旅行記で、「西京紀行」「箱根客寓」など20編の小旅行記からなる(4)。

『漫遊記』の文体は、「明治十年丁丑ノ夏故アリテ西京ニ上ル余時ニ長岡中学ノ教班ニ列ス」(西京紀行・93)といったように、漢文訓読体で書かれ、極めて簡潔・直截である。

「西京紀行」は、明治10年7月8日、故郷の浦村(新潟県)を出発し、京都まで2週間の旅程を綴った小旅行記である。もっとも「西京紀行」に月の記述はない。旅行中、天候に恵まれず、月を見ることができなかったからである。「十九日朝雨ヲ冒テ赤坂垂井ヲ歴関ヶ原ニ至ル」(西京紀行・96)「午后雨又晴レ・・・家ヲ辞シテヨリ十三日迄ハ一日モ雨ニ遇ハサル日ナシ十四日ヨリ今日迄ハ雨ニ遇フタルコトナシ只今朝細雨ニ^{ウルオ}霽フノミ」(西京紀行・96)。

円了旅行記に初出する月の記述は、明治12年1月2日、友人二人と江

の島、鎌倉に遊んだときのものである。「月明ニ会シ夜景更ニ幽ナリ」(江島紀行・98)。

21歳の円了は、月夜、特にひときわ明るい満月の夜を「幽(玄)」の趣があると感じた。そして明月に照らされた伊豆・修善寺の夜景に「塵外ノ趣」を見出した。「修善寺ニ着ス夜六時半ナリ明月天ニ懸リ山水霜ヲ帯ヒ塵外ノ趣アリ」(豆州漫遊・125)。

月を観ながら学友たちと酒を飲んだ。「一夕親友四五名ヲ会シテ清宴ヲ開ク時月夜ニ当リ千里雲ナクシテ長空洗フカ如シ」(寓居記事・106)。他の学友たちはいざ知らず、円了にとって月夜の宴は幽趣・幽玄の時となった。

このように『漫遊記』では、明月、月明が創り出す「幽趣」の景観がモチーフとなっている。そこには、すでに、生涯、風月を友とし、こよなく月を愛したロマンチスト、詩人としての円了がいた(5)。

円了は明月とその樹影のコントラストを「明月林端ニ懸テ樹影蒼然タリ」(寓居記事・106)と表現する。こうした描写の絵画的表現の巧みさは円了の漢詩の特徴の一つとなっている。

真夏の月夜に蝉の鳴き声が聞こえてくるが、それもまた「幽趣」の時として円了に詩を作らせた。「月色蝉声恰モ塵界ヲ去テ仙郷ニ遊フカ如ク幽趣閑興真ニ味フルニ堪タリ因テ一咏ス」(寓居記事・106)。ちなみに漢詩、旅行記には、月に添えて、時に、犬、鶏、虫の声などが加わることがある(6)。こうした月と動物の鳴き声との併記は後年の旅行記にも散見される。

このように、学生時代の円了は、明月・涼月が演ずる「幽趣」の夜景に惹かれ、観月を愉しんだ。「旧七月中旬ニ当リ毎夜ノ清風涼月快ヲ洗フカ如シ三日夜白山ニ涼ヲ納レ四日夜日和山ニ月ヲ観ル・・・毎夜書窓ノ月ヲ玩フ幽趣限りナシ」(冬夏遊跡・122)。

『漫遊記』にみる円了の観月趣向は終生変わることなく、後年の旅行記

に受け継がれていく。ただ、月の描写・記述は、概して（趣味としての）自作の漢詩に取り上げられるものであり、その表現には幾分脚色された嫌いがある。類似の表現も多い。そのような漢詩は、円了にとっては、あくまで余技であった。とはいえ、「事に遇い、風物に触れては詩情をかきたてられ」（7）、生涯、実に多くの漢詩を残している（8）。

3. 「館主巡回日記」にみる月—光風霽月の和田山

円了はその生涯に3,578日にも及ぶ巡講を行い、その記録・日誌を「館主巡回日記」、『南船北馬集』として公表している。巡講は前期と後期に分かれる。「館主巡回日記」は、当初、『哲学館講義録』などに収められていた前期巡講の日誌である。後期巡講の日誌は『南船北馬集』（全15巻）として刊行された（9）。

円了は巡講の先々で様々な風物を見聞するが、心に留まった風景、関心をもった事物の印象や所感を日誌に記している。明治23年11月2日から明治38年8月4日に渡る「館主巡回日記」は、その性格上、記録的、客観的記述を旨としているため、円了個人の心情などは特段記されていないが、それでも、ときに巡講の最中、思わず遭遇した絶景に感嘆の声を上げ、喜びを表す円了がいた。

「親不知の新道を越え、越中の国境に入る。海上の風景すこぶる佳なり」（12・137）。「海山の眺望ことに佳なり」（12・144）。「海上眺望すこぶる佳し」（12・163）。

このような風景賛美の感情表出は、円了旅行記の特徴の一つで、その後の旅行記にもしばしば見られる。月もそうした風景賛美の一環と考えられるが、「館主巡回日記」では、明治38年8月の「関西紀行」まで月の記述はない。

「関西紀行」は『修身教会雑誌』第21号（明治38年9月11日発行）に掲載されたもので、やや長い散文形式の紀行文となっている。それに

よれば、明治38年8月4日から10日まで、「馬関（下関）の講習会」に出席した円了は、当地の寺院に宿泊、「堂に座して海峡の風景を一瞰すべし。爽快いふべからず。余、一吟あり」（12・172）と、月と酒を題材に漢詩を詠んでいる。「赤馬関頭月、光明寺裏風、願携此風月、去酌墨江中（赤馬関に懸かる月、光明寺に吹く風、願はくば、この風と月とを持って行き、隅田川で月を愛でつつ酒を酌みたいものである）」（12・172）。

8月11日、馬関を後に、九州・唐津での講習会に臨む。唐津滞在は、「連宵雨に会ひ月光に接するを得ず。遺憾極まりなし」（12・176）と無月の夜に落胆、その思いを詠った。「暑余探勝入肥州、来宿唐津第一楼、何事覓林如有恨、不令月色触五眸（暑熱のうちに景勝を求め肥前の地に入り、唐津第一の宿楼に入ったが、なぜか虹の松原に遺恨があるように月の光はわが目を楽しませることはなかったのである）」（12・176）。

しかし、天候は回復し、18日夕方、「当地病院長古川俊氏の宅に遊び、観月の宴に列す」（12・177）。「満天晴れ渡りて一輪空間に懸かる。その趣、実に妙のまた妙なる」（12・177）を覚えた円了は、席上一作、次の漢詩をものした。「風払覓林夜景開、松羅橋上月徘徊（風は虹の松原に吹き渡って夜景が開け、松羅橋の上に月が差し掛かった）」（12・177）。

その後、有田、伊万里、佐世保と巡り、筑前・肥前の風月の幽美を堪能、夜行汽車で帰京、和田山の哲学堂に帰着、即吟一首を得た。「消暑三旬客異郷、帰来先謁四賢堂、光風霽月依然在、始識是吾无尽蔵（夏の暑さをしのぐこと三十日、異郷に旅し、帰り来て、まず四聖堂を訪ねる。風光と晴れた月は以前のままにあり、はじめてこれこそわが尽きることのない蔵であることを知るのであった）」（12・183）。

「館主巡回日記」（＝関西紀行）における月の描写・記述は、いずれも漢詩の題材として取り上げられたもので、脚色された嫌いはあるが、終生、風月を友とし、観月を趣味とした円了の姿があった。

4. 『南船北馬集』にみる月—明月皎然として観月をなす

月を愛で、観月を趣味とした円了の趣向は、後期巡講旅行記『南船北馬集』に受け継がれる。旅行記には漢詩とともに多様な月の散文表現が見られる。大学の経営からは身を引き、余裕が出てきた。

『南船北馬集』は期間（明治37年1月～大正8年6月）が長く、旅行記の分量も増大する。月の描写・記述は多様化、類似の表現も多くみられる。以下、その内容を幾つかの項目に分け、特徴を記す⁽¹⁰⁾。

① 位相一天に懸かる明月

円了は、月（の出）を心にかけて、その視線は天に向かう。「三角山頭月一輪（三角の山上に明月がまるい姿を見せていた）」（12・470）。「この夕、天やうやく晴れ、夜に入りて明月天に懸かり、四面清朗なり」（14・88）。

② 形状—淡雲織月

月は、新月、三日月（弓張月）、半月（上弦）、満月、十六夜、半月（下弦）、二十三夜と満ち欠けする。月齢ごとに呼び名が異なる。別名もある。そのような月の形状を記す。

「淡雲織月夜蒼々（淡い雲に細い月が浮かび夜は青く薄暗い）」（12・468）。「愛宕山頭月一弦（愛宕山に弓張月が懸かっている）」（12・251）。「月まどかに光満ち、この良夜をいかんせんの趣あり」（14・145）。

③ 様相—光風霽月

月の様相・表情を記す。「光風霽月是蓬莱（風景と晴れた夜の月はまさに神仙住む地である）」（13・359）。「一痕霜月宿寒溪（一片の霜を帯びた月が寒々とした谷に懸かっている）」（14・88～89）。「月如有意来相照、晚翠楼頭躍玉竜（月も心あるものの如く・・・晚翠館の階上には月光を受けて輝く松の枝が揺らめいていた）」（13・42）。

円了の視線は窓から入る月光、川面に映る月光に注がれる。「ときに月光客窓に入り来たる」（15・226）。「寒月高く懸かり、その光由良川（京都府）の波上に照映するところ、実に世外の趣あり」（15・79～80）。

④ 円了を捉えた満月の輝き

円了は、まばゆい満月の明るさ、清らかな月の光に惹かれた。「当夕、旧曆七月十五日に当たり、明月輝を放つ」(14・166)。「この夜、天晴れ月明らかに深更に至り一天片雲なく、清輝白昼を欺く」(14・350～351)。「天晴れ気澄み、明月皎然として碧空に懸かり、霜気白く夜色昼を欺かんとす」(15・228)。「今夕も一天片雲なく、明月皓然たり」(15・347)。

⑤ 月の色調一白、銀、霜

円了は月の光を霜の白さに喩える。「今夜、月光霜よりも白し」(15・81)。月は白霜とともに輝きを増す。「一天雲なく月光霜気を帯びて白し・・・今夜また満天皎々、月色銀の如し」(15・370)。清らかで明るい白い月、銀の月の描写・記述は、視覚的、絵画的、時に幻想的である。また白霜は寒月、満月と対をなす。「夜に入り寒月霜気を帯び溪山皎々たり」(14・256)。「満月皎として霜気を帯ぶるが如し」(15・409)。「一天雲なく満月皎々、霜気稜々たり」(14・388)。

⑥ 観月の宴

旅先での観月を円了は愉しみとした。「ときまさに中秋三五の月明に会し、凶らずも飛州(飛驒)の観月をなす」(13・221)。「当夕、中秋十五夜なるにこの惨事(台風)あり。天また無情なりと言ふべし。・・・(しかして翌日)今夜は旧八月十六日に当たり、明月高く懸かり、清光天地に満ち、これに加うるに宿寺の境幽に庭広く(かえって)観月に適す」(15・214)夜となった。

「秩父(埼玉県)第一の勝地たる長瀨に至りて休泊す。旅館を長瀨館と言ひ、鉄道会社の経営にして新築すでに成る。このときたまたま中秋明月に会し、臨時列車の往復ありて観月の客群衆し、楼上立錐の地を余さぬほどなり。館は荒川の溪流に枕し、白鳥島の奇巖に面し、対岸の松巒はあたたかも鏡台の如く、その上に一輪の明月をいただくところ、実に赤壁の趣あり」(13・345)。この日(大正元年9月27日)、秩父鉄道(埼玉)

では月見の臨時列車まで出していた。

観月は酒を伴う。「三更対月傾（三更[夜十二時前後]月に向かつて杯を傾けた）」(12・519)。「天晴れ月満ち、夜景洗ふが如く、清光座に入る。ときに笛を聴き、杯を傾け、観月の小宴を擬す。即吟一首を得たり」(12・240)。

⑦ 無月は遺憾なり

風光明月が円了の最大の愉しみ、月のない「無月」を遺憾とした。「当夕、三五の明月なるも、雲霧を隔てて見ることを得ざるは遺憾なり」(12・386)。「中秋三五の明月なるも不幸にして月影に接するを得ず」(12・254)。「夜に入りて月すでに三笠山に隠れ、旅館の地位は観月に適するも月を賞することを得ざるは遺憾なり」(13・93)。

⑧ 因縁の観月

「無月」を遺憾とした円了は、思いがけず旅先で仰ぐ明月に感動し、これを「因縁」と評した。

明治39年10月3日、壱岐で月見をする。「夜に入りて雲やうやく晴れ、清光天に満ち、月華座に入る。かかる絶海の孤島（壱岐）にありて中秋の観月をなすは実に不思議の因縁と言はざるを得ず」(12・255)。「去月は福島かいかくの海角（海に突き出た陸地の先端）にありて明月を望み、本月は壱州（壱岐）の仙源にありて中秋に会するもまた奇遇なり」(12・255)。

翌月、壱岐で見た明月に韓国で再会する。「時に陰曆十三夜にして夜に入りて月色愈々明かなり、先に壱州（壱岐）にありて中秋の明月を賞し、今韓国に入りて後の明月を望むも亦因縁と謂ふべし」（満漢紀行・65～66）。「山白く月も亦白く、（韓国は）別天地の観あり」（満漢紀行・76）。

明治44年2月14日、台湾では「たまたま満月に会す。春天洗ふが如く一点の雲影を見ず。異郷にありて中秋の月を望む心地し、壯絶又快絶なり・・・（翌日）夕刻市街を通覧す。夜中月亦好し」（台湾紀行・34）

と外地での観月に満足している。

⑨ 月と蛙

月のない清輝楼上の夕べにあっても蛙の声が円了の夢を誘った。「無月清輝楼上夕、蛙声誘夢客眠安」(14・297)。月とともに琴のような水音と鼓のような蛙の鳴き声が円了の心を和ませた。「水琴蛙鼓伴閑吟」(13・166)。

旅の宿には月の光とともに蛙の声も入って来た。「蛙声月色客楼に入るところ、すこぶる幽趣あり」(14・109)。「池蛙伝念仏、庭樹現真如、酌月三杯酒、読風百卷書(池の蛙は念仏を伝え、庭の樹は真如を現す。月を友に酒杯を重ね、百巻の書を読み)」(12・239)、ときに「明月林端に懸かり、鳴蛙田頭にやかまし」(14・318)だったが、「朦朧月下聴蛙眠(おぼろ月の下、蛙の声を聞きながら眠りに就いた)」(13・340)。

⑩ 月をいただき、友とする旅

月をいただき、月を友に旅を続けた。「夜に入り、月をいただき、霜を踏みて乗車し、急行伊予に向かふ」(13・10)。「午前四時に起き、月をいただききて汽船に駕す」(14・91)。「早天暁霜を踏み、残月をいただききて出発」(14・199)、講演を終え、宿所の寺に帰る。「夜に入りて天全く晴る。明月を仰ぎつつ稲荷屋に帰宿す」(14・201)。「人迎亀井城頭月(亀井城[延岡城]の上に出る月に迎へられ)」(12・328)、「明月皎々たり。月影を踏みて赤羽駅に至り、即夜帰京」(13・355)した。

⑪ 月と詩情

風月は、円了の詩心を養い、詩情を誘う。清風明月が「詩思」を動かし、「詩意」を実現した。「風月養吟情(風月は詩心を養なふ)」(12・243)。「当夜、庭前の月に対して吟賞す」(12・252)。「船窓の風光おのずから詩思を動かす」(13・43)。「今秋以来、初めて雪を見る。夜に入りて天全く晴れ、寒月皎々たり。詩思忽然として動き来たる」(15・243)。「その夜、清風明月、この詩意を実現」(14・10)する。

円了は詩を作ることは自らの精神を慰める、気晴らし、楽しみであると述べている(11)。とりわけ、国内巡講、(後述する)海外視察旅行の最中、漢詩は長い車中、船中の手持ち無沙汰を慰めるものとなっていただろう。

⑫ 月食

光風霽月せいげつを愛でた円了だが、観察的な記述もある。「当夕、旧曆七月十五日に当たり、明月輝を放つ・・・九時より月食始まり十時後は八、九分どほり光を失ふ」(14・166)。「たまたま月食皆既に会す。一天雲なく、午後八時、球面全く黒し。少時の後、明月に復し、清輝天地に満つ」(13・447)。

一方で、「ときに狂歌一首を浮かぶ。酌むうちに月は皆既になりたれど、酒は皆既にならぬ間に酔ふ」(13・447)と狂歌(戯言)を記している。日食もあつたが寝過ぎて見られなかった。「今朝日蝕皆既なるも、臥床中にて見るを得ず」(朝鮮巡講第一回・113)。

以上のように、『南船北馬集』には月の多様な描写・記述、表現が見られ、いずれの詩文にも円了の月への思い・関心が表出している。旅にあつても円了は嬉々として月を愛で、観月をなした。そして好んで詩の題材に月を取り上げた。こうした趣向は海外(旅行)にあつても変わることがなかった。

5. 海外視察旅行記にみる月

円了は当時としては異例ともいべき生涯に3回の海外視察旅行を行い、三つの旅行記を著わしている(12)。第1回、第2回は欧米中心だったが、第3回は南半球にまで足を延ばした。旅行記には初めて目にする事物や光景に目を奪われる一旅行者としての円了がいた。海外(旅行)にあつても、国内巡講と同様、円了は月をよく見、また詩を作った。

5. 1 『西航日録』にみる月—清風涼月、一段の妙あり

2回目の海外視察旅行（明治35年11月15日～明治36年7月27日）の旅行記が『西航日録』（明治37年1月、鶏声堂）である。横浜出港、神戸に寄港、旅の心境を月に託す。

「当夜四面雲晴れ、明月天に懸かり、波間の清（光）数点の船灯と相映じ、湾内の風光筆紙のよく尽くすところにあらず。余、船中にありて、阜頭明月情如満、不照江山照我心（埠頭の明月は満月の如く、江山を照らさずして我が心を照らす）とうそふけり」（23・160）。

香港では「夜に入りて月まさに暗し。満天星近く懸かり港内の灯光上下点々あたかも螢火を見るが如き観」（23・163）があった。

シンガポールでは天が洗われたかのような雷雨の後、「涼月高懸赤道山（涼しげな月が高く赤道の山に懸かった）」（23・164）と漢詩に詠っている。

インド洋を過ぎ、ベンガル湾に入る。「毎日快晴。涼風船上を払ひ暑氣大いに減ずるを覚ゆ。ことに毎夕、明月中天に懸かり、四面雲影を見ず。蒼海渺茫としてただ流光の波間に踊るを見るはまた無限の趣あり」（23・167）と感じ入った。

ヒマラヤの高峰を見るためダーズリンに向かう。天候に恵まれなかったが、「その夜より雲やうやく晴る。よつて即夜旅装を整へ、翌朝三時寓居を発し、月をいただきて行くこと六マイル、タイガーヒル（Tigerhill）山頂に達」（23・173）し、夜明けを待った。河口慧海とともに詩を賦す。「鶏声残月暁天晴、霞氣浮紅日欲生（鶏の声となごりの月に夜明けの空は晴れわたり霞に紅の色をにじませて日は昇ろう）」（23・173）としていた。

再びインド洋に入る。「風清く波穏やかかなり。かつ毎日天遠く晴れ、毎夜月高く懸かり、洋中の風光また一段の妙あり」と記し、「清風涼月掛檣頭（清らかな風が吹き、涼しげな月が帆柱に懸かる）」（23・180）。その風情を漢詩に詠んでいる。

地中海に入る。「紅海尽头風月幽・・・客身已在天涯外、遮莫家鄉憶遠遊（紅海の尽きるあたり、風も月もほのかに・・・旅客の身はすでに天の果てにある。それはそれとして故郷では遠く旅にあると思っているだろう）」(23・181)。天に懸かる月が旅情を誘う。

英国に着いたのは明治36年1月24日。この少し前、日本では哲学館事件が起こっていた。1月30日、事件の報に接する。「東京より飛報あり。曰く、(明治35年)十二月十三日、官報をもつて文部省より、本館倫理科講師所用の教科書に関し、教授上不注意のかどありとて、教員認可取り消しの厳命あり云云」(23・188)。円了は「苦にするな荒しの後に日和あり」(23・188)と記し、旅行を続けた。

アイルランドへ向かう。海上は風も静かに波も平らかだった。「海風吹断月如環、望裏送迎英北山（海の風は途絶えて月が輪のような姿を見せ、これをはるかに見るうちに船は英国の北の山を送り迎えて進）」(23・193) んでいった。

ロンドン郊外ヘースティングズの温泉宿には月光が入り、潮騒も聞こえてきた。「月色潮声入客楼」(23・206)。スコットランドの温泉地パースでは「阿盆江畔満山春、詠月吟花且養神（阿盆の溪流のほとり、山は春に満ち、[当地の人々が]月や花を吟詠して精神を養生する）」(23・226) ことを漢詩に詠った。

その後、大西洋を渡り、米国を経て、帰国の途に就いた。米国・シアトル出港の際、「長編を綴る」(23・233)。「・・・天外雲鎖渾渺漠、檣頭風掛自清涼、更無山影入吟望、時月光窺客牀、喜此波上甚静穩・・・従今旬余到家郷（天のあなたは雲が閉ざし、すべてが広く果てしなく、帆柱の上を吹く風には自ずから清涼の気がある。山の影は詩人の目に入ってくることなく、ときに月光が船客の寝台を照らす。この波の極めて静穏であることを喜び、わが閑中に却って多忙なるを笑う・・・なぜなら今より十余日もすれば家郷に至るからである）」(23・233～234)。帰

国の喜びをかみしめる詩だが、哲学館事件の憂いは頭をよぎっていただろう。

5. 2 『南半球五万哩』にみる月—北天の秋月、故国を思う

第3回海外視察旅行（明治44年4月～明治45年1月）の旅行記『南半球五万^{マイル}哩』（明治45年3月、丙午出版社）になると、月の描写・記述は、繊細さ、豊かさに抒情性と表現の巧みさを加えていく。

① 異国の観月

海外にあっても、否、むしろ海外にあつてこそ、円了の目は天空に浮かぶ月に向いた。まず、月の形状・位相・様相を記す（その多くは漢詩を介しての描写・記述である）。類似の表現・形容は多いが、異国で見た月への思いが表出する。

「満船清涼、半輪の明月高く西天に懸かる」（23・347）。「夜に入りて一天雲なく、ただ一鉤の涼月を望むのみ」（23・422）。「今宵三五月如鏡（今宵の十五夜の月は鏡の如く映えて）」（23・377）、「夜に入りて一天片雲なく、明月ひとり皓々たり」（23・426）。

「夜に入りて天遠く晴れ、月高く懸かるも・・・春天朦朧の観あり・・・（翌日）深更に至り明月清輝を放つ」（23・355）。「赤道直下は短日にして、午後六時半には全く暗黒となる。・・・慕天一鉤の新月を望むところ大いに雅趣あり」（23・304）。

観月の趣向は異国にあつても変わらない。

赤道直下、船上の観月に酔いしれた。「午後六時十分に太陽は地平線下に入りてその形を失ふ。ときに明月さらに東空に懸かる。当夜は満月なり。六時三十分、全く残光を失ふ。赤道直下なるによる。八時後、雲ことごとく消して、ただ一輪の明月を仰ぐのみ。船客中ドイツ人ウルリヒ氏とともに船橋上に踞し、観月の宴をなして深更に及ぶ。清風おもむろに來たりて爽快極まりなし」（23・414）。

② 帆柱にかかる月―旅情、詩情、望郷の念

異国にあってみる月は円了に様々な思いを抱かせた。とりわけ旅情、詩情、望郷の念が円了の心を捉えた。すなわち、長い船旅は自らが「孤独な旅人」であることを自覚させ、天空、帆柱に懸かる月は、「旅の友」であるとともに、(詩人としての)円了に漢詩を作らせた。こうした旅情・詩情は望郷の念へと転じていく。

[旅情]

「万里雲晴月一輪、清光入海海如銀、船窓今夜眠難就、照殺天涯孤客身(万里の雲晴れて明月浮かび、清光は海を照らし銀色に輝く。この風景を船窓より見る。今夜は眠るに惜しく月光は天涯に一人旅する身を照らしている)」(23・295～296)。

「仰望東天懸鏡、照見遠遊孤客身」(東の空を望めば鏡を懸けたように月が見え、遠くやってきた孤独な旅人を照らしている)」(23・414)。

「夜に入りて海水滑らかなること油の如く、明月雲間より照らし来たる。夜を重ね雲の断間に出る月は長き船旅の友にぞありける」(23・415)。

[詩情]

北天に懸かる明月が円了の詩情を誘う。「夜に入りて天やうやく晴れ、一輪の秋月北天に懸かる。詩思自ずから動く」(23・275)。パリにあっては「ときに旧暦九月十三夕に当たり、一輪の明月清輝を送り、あたかもその歡を助くるものの如し。余はその盛況を写さんと欲して二首を得たり」(23・396)。

「孤客春風夕、来投巴里城、併看花与月、想起故園情(孤独な旅人が春風の吹く夕べに^{パリ}巴里市に来て身を寄せた。そこでは花と月をともに眺め、遠い故国の風景を想い起こしたのである)」(23・449～450)。

漢詩には花月を愛でながらも故国への思いが強くにじむ。「思郷の念」は禁じ難かった。

「海上は風清く涼満ち、更に炎暑を覚えず。ことに夜に入りて明月空

際に懸かり清光を送り来たるところ実に物外の趣ありて人をして吟情を動かさしむ。また思郷の念禁じ難し」(23・352)。

[望郷]

以下の詩には、いずれも月に託した故国、家族への思い、すなわち望郷の念が強くにじむ。「每逢明月憶家郷、秋風今夜団欒坐（[意気込んだ旅ではあるが]明月に出会うごとに家郷を思い・・・秋風の吹く今宵も団欒の座を思うのである）」(23・352)。

「雨過秋宵露氣寒、家書不到思漫漫、知吾独有故山月、飽見北天光一團（雨一過して秋の宵に露の気配も寒々しく家からの手紙も途絶えて思いは乱れる。自分を知るものはただ故郷の月のみ。北の空に懸かる円い月を見る）」(23・275)。

「家からの手紙も途絶えて思いは乱れる」といった表現はホームシックにかかった心情を思わず（漢詩に託して）吐露した形だが、さながら阿倍仲麻呂の心境だったのではないだろうか。

だからこそ、明治45年元旦、太平洋上の船中で詠んだ次の漢詩には（新春の慶びとともに）待ちわびた帰国への喜びが窺われる。「望中雲綻漏涼月、認得破顔微笑春（一望のうちに雲の隙間から涼しげな月の光が漏れ、思わず顔をほころばせ、微笑を含んで春を待つ心境となった）」(23・424～425)。

③ 南半球の月—奇異の感抱く

北半球と異なり南半球では「日月を北天に仰ぐ」(23・357)。「夜に入りて天気ことに清朗、一輪の明月北天に懸かり、清輝客庭に満つ」(23・376)。

赤道通過時、「いまだ赤道を越えざるも日はすでに南天に入る。しかして月なほ北天にあり」(23・413)。「深夜天頂を仰ぐに月まさしく頭上に懸かるを見る。これより後は月もまた南天に入るべし」(23・415)。

円了は月が日本と異なる見え方をするのに気づく(13)。また月を「月

球」と表現する。「新月西天に懸かる。その光は月球の下縁にあり」(23・407)。「半輪の月を望むに、わが日本にて望むとはその形を異にし、月球の左半面にあらずして下半面に光を生ぜるを見る」(23・357～358)。「月を北天に望み、半輪を下辺に生ずるは、やや奇異の感なきあたはず」(23・374)。

南半球の月の見え方に違和感を覚えた円了だが、「夜に入りて一輪の明月を頭上にいただく。一望すこぶる壮快なり」(23・413～414)と異国で見た明月に思わず感嘆の声を上げた。

④ 圧巻の白夜体験記

『南船北馬集』における観察的な描写・記述で注目すべきは白夜体験記である。その筆致は(月ではないが)臨場感にあふれ、圧巻である。

「夜十時に至りやうやく太陽を失ふも天なほ明らかにして昼の如く星光力を失ひ、ただ二個の星宿を認むるのみ」(23・315～316)。「太陽は六時、七時の間は西方にあり。これよりやうやく北方に移り、夜十一時日の没するときはほとんど正北に近き方位にある。没後北天紅を吐き、毫も白昼と異ならず」(23・319)。

「当夜一時十五分頃より日輪の上端の地平線上に放光するを見る。これより遅々として昇るに、その全面の海上に現出するまでにおよそ三、四十分間を要せり。ときに天涯遠く晴れて片雲なく、清朗の北天に旭日を懸け、その光気の海水に映射する光景は言亡慮絶の妙趣を実現せり。終夜天明らかにして一点の星光を認めざるは前夕の如し」(23・320)。

翌日、「当夜は十二時に至るも太陽地下に入らず。まさしく北天に懸かり、徐々として東方に移る。一天片雲なきもまた星光を認めず。全く白昼なり。・・・船客、多く徹夜して太陽を望む。なんとなく奇異の感に打たる」(23・321)。

6 むすび—円了と月

幼い頃より円了は自然界に親しんだ。学問を学ぶようになってからは雪月花の世界を知り、漢詩を作るが、題材の一つに好んで月を選んだ。学生時代も月を友に酒宴に興じ、漢詩を詠み、観月を愉しんだ。

後年の巡講や海外視察旅行でも旅先で見た月の印象や所感を、それぞれの旅行記に漢詩を交えながら情緒豊かに綴っている。風景賛美が円了旅行記の特徴の一つだが、月もまたそのような観点から描写・記述されたものとする。明月、満月、涼月、寒月に会することが、円了にとっては、無上の愉しみ、慰めとなっていた。

人はふだん月など見ない。円了は、しかし、幼い頃から月を見る習慣があった(と考える)。生涯、月に思いを寄せ、月を愛で、月に親しんだ。とりわけ旅にあつては「風月為真友(風月を真の友となし)」(12・240)、折に触れて月の印象・所感を綴っている。国内外、実に多くの旅行をした円了だが、旅先で月を見ることを忘れなかった。否、むしろ、旅行中は、より注意・関心をもって月を見ていた(14)。旅行記には、風月を友とし、自然と交わり、風にうそぶき、風流を愉しむ詩人としての円了がいた。

そのような円了にとって月はどのような意味をもっていたのだろうか。結論からいえば、円了にとって、月は漢詩とともに旅を和ませる心の糧となっていた。月が旅行(記)に花を添えていたといってもよい。なるほど、旅行記から月の描写・記述を除いたとしても、その質を減ずるものではない。が、月の描写・記述があることによって、円了旅行記は極めてユニーク、情趣豊かなものとなっている。

この点は、随所に月への思いを記した平安中期の女流日記(=紀行文)『更級日記』を彷彿させる(15)。ともあれ、漢詩と月は、円了にとって、旅の慰めとなっていた。

ちなみに、「明月」は、清新さの象徴(「身花心月更清新」(身は花の如

く心は月の如くさらに清新ならんことを)」(13・182)であるとともに「真理の明月」、すなわち真理の象徴でもあった(16)。また円了は「清風明月」を「真怪」と捉えていた(17)。

【註】

- (1) 井上円了の旅行記からの引用については以下の通りとする。
 - ①井上円了選集からの引用の出所はかっこ内の巻数・頁数で本文中に示す。
 - ②井上甫水『漫遊記』からの引用はそこに所収された小旅行記名と当該文献の頁数をかっこ内で本文中に示す。例：(西京紀行・93)
 - ③井上円了選集に所収されていない『南船北馬集』中の「満韓紀行」、「台湾紀行」、「朝鮮巡講」からの引用は当該紀行の題名と初出本の頁数をかっこ内で本文中に示す。例：(満漢紀行・76)。なお上記引用に際して(読み易くするため)かなづかいを改める、ひらがなを漢字にするなど一部表記を変えたところがある。
 - ④上記以外の文献の引用については巻末【参考文献】の著者名、発行年、頁数で示す。
- (2) 「私は幼いころより世人とその好悪を異にしていました。・・・私の楽しみは・・・外に出て河や山の間に入れば、草木の森々としておのずから繁茂するのを見て、また流水の悠々として去って帰らざることを見て、心ひそかに怪しむところがあり、家に帰ってその理を思ったものです。」三浦(2014)8～9頁、引用。幼少期より自然界に親しみ、自然の摂理に深い関心を寄せていた円了が当然月にも目を向けることはあったろうと推察する。
- (3) 本論で取り上げる円了旅行記は、『漫遊記』、「館主巡回日記」、『南船北馬集』、『西航日録』、『南半球五万哩』とする。なお「描写」とは月に対する内的・情動的な思いが感じられる表現、例えば「清風涼月快を洗フカ如シ」など。「記述」とは月に対する客観的、観察的な表現、例えば「寒月高くかかり」などとするが特段厳密に区別しているわけではない。
- (4) 井上(1992)、三浦・豊田(1992)130～131頁、堀(2016)61～90頁、参照。なお円了には『漫遊記』より先、明治5年、15歳のときに編んだ自筆の漢詩集『襲常詩稿』がある。そこには月を題材にした漢詩数編が

ある。例えば「天外月明鳴雁頻（天空の月明りの中を鳴き渡る雁の聲が頻りにする）」、「斜月掛疎松（残月は斜めにまばらな松の上にある）」、「月色妍妍夜色鮮（月色は麗しく夜景はひとときわ浮き立つ）」、「蕭疎簾月影沈沈（清らかな月が輝き夜は静かに更けていく）」など。その後の漢詩集『詩冊』、『屈蠖詩集』にも月を詠んだ漢詩が多く残されている。新田・長谷川・中村（2008）、参照。「詩句は人によりて、おのおのその好むところを異にするも、余は最も月と梅を詠じたる句を愛するなり」（24・159）。

- (5) 「円了は近代日本に生きた『信念の人』であり、また『ロマンチスト』でもあった。」三浦（2008）356頁、引用。「何でも無いものを詩に仕立て上げる力を詩才と呼ぶなら、円了には確かに詩才があったというべきであろう。」長谷川（2008b）222頁、引用。
- (6) 「村犬ノ月ニ号ヒ草蛸ノ露ニ泣クアリ」（寓居記事・106）。
- (7) 新田（2008）252頁、引用。
- (8) 円了にとって「漢詩は第一義のものではなかった。専門とすべきものではなく、あくまでも余技であり、『スケッチの代りに拙工を以て所感の儘を韻文上に模写する』（井上円了「序言」『未知句齋集』）ためのものだったのだろう。しかしほぼその生涯にわたって漢詩を作り続けていることもまた紛れもない事実である。この事実を以てすれば、漢詩は円了にとって身近なものであり続けたと言うべきであろう。」（長谷川[2008a]215～216頁、引用）。「井上円了における漢詩は、備忘のために風物を詠じ、詩句を考える遊芸とのみでは律しきれないものがある。適度の感懐を述べるにふさわしい手段でもあったように思われる。」新田（2008）263頁、引用。以上のような円了の漢詩について以下の指摘がある。①旅愁の意を含む詩が多い。②風物を詩中にどう組み入れるかに苦心している。③風物を詠ずるものが主となっている。新田（2008）255～258頁、参照。
- (9) 堀（2017）75～101頁、参照。『南船北馬集』第16巻は遺稿集として出版された。
- (10) 月の記述・描写の引用については月の表現の意図を整理・分類、明示する必要から時系列によらず、内容・項目別に任意に接続させる形で散文化した。円了の月への関心・思い、表現の意図を体系的に把握するためである。
- (11) 「余は詩を作ることを知らざれども、詩を読むことを好む。これ、精神を慰むるためのみ。古人の詩中には、往々五字七字の単句中に妙趣深

意を含むものありて、一読大いに精神をさわやかにし、嗜好を高むるに足る。」(24・158)。

- (12) 第1回の旅行記『欧米各国政教日記』上編・下編(哲学書院、明治22年)については月の記載はなく、その内容は旅行記とはいえないため省く。留意すべきは海外視察旅行記にみる月の描写・記述の多くが漢詩を介して見られることである。それゆえ漢詩と(漢詩の題材としての)月の関係は深いものとする。「第一回は余のいまだ詩をよくせざりしときなれば、一回も試吟せしことなかりき。第二回には船中徒然を慰めんと欲して、予め初学用の詩本を携へ、初めて詩作を試み、数十首を得たれども、当時いたつて未熟にして、詩句をなさざるもの多かりしが、今多少の増訂を施して、ここに付記することとなす。まず五言絶句を掲げて、つぎに七言に及ぶべし。その次第は旅行の順路による。」(23・444)。
- (13) 月の形の見え方に北半球と南半球の相違はないのでこれは円了の錯覚と考える。
- (14) 当然のことながら月は常に見えているわけではない。昼間は見えないし、天候が悪ければ見えない。また月齢に応じて昇ってくる時刻も異なる。下弦以降の月は深夜に昇ってくるからそれを目にする機会はほとんどない。蛇足ながら月を見る前提として視力がある。視力が弱ければ月の形状・様相を正確に認識し、鑑賞する意識は生まれにくいだろう。それゆえ円了は視力が良かったものとする。
- (15) 『更級日記』には多くの月の描写、月を詠んだ和歌がある。関根(2015)、参照。
- (16) 新田・長谷川・中村(2008)241頁、三浦(2016)184頁、参照。
- (17) 竹村(2017)229頁、参照。

【参考文献】

- 井上円了(1906)「満漢紀行」『南船北馬集第一編』明治41年、64~77頁
井上円了(1911)「台湾紀行」『南船北馬集第六編』明治45年、13~45頁
井上円了(1918)「朝鮮巡講第一回(西鮮及中鮮)日誌」『南船北馬集第十五編』大正7年、103~116頁
井上甫水(1992)「漫遊記 第一編・第二編」『井上円了センター年報』Vol.1、(東洋大学)井上円了記念学術センター、1992年3月、93~129頁
関根慶子(2015)『新版 全訳注 更級日記』講談社(講談社学術文庫)
竹村牧男(2017)『井上円了一その哲学・思想』春秋社

- (東洋大学) 井上円了記念学術センター編 (1997a) 『井上円了選集』 第12巻
(東洋大学) 井上円了記念学術センター編 (1997b) 『井上円了選集』 第13巻
(東洋大学) 井上円了記念学術センター編 (1998a) 『井上円了選集』 第14巻
(東洋大学) 井上円了記念学術センター編 (1998b) 『井上円了選集』 第15巻
東洋大学井上円了記念学術センター編 (2003) 『井上円了選集』 第23巻
東洋大学井上円了記念学術センター編 (2004) 『井上円了選集』 第24巻
新田幸治・長谷川潤治・中村聡編訳 (2008) 『甬水井上円了漢詩集—「襲常詩稿」「詩冊」「屈蠖詩集」訳註—』 三文舎
新田幸治 (2008) 「井上円了の漢詩集について」 新田・長谷川・中村 (2008)
245～266 頁
長谷川潤治 (2008a) 「『甬水井上円了漢詩集』 解題」 新田・長谷川・中村 (2008)
211～216 頁
長谷川潤治 (2008b) 「『襲常詩稿』 について」 新田・長谷川・中村 (2008)
217～225 頁
堀雅通 (2016a) 「旅行記にみる井上円了の観光行動」 『国際井上円了研究』 第4
号、国際井上円了学会、2016年3月、137～155 頁
堀雅通 (2016b) 「井上甬水著『漫遊記』 にみる井上円了の観光行動について」
『大学院紀要』 第52集、東洋大学大学院国際地域学研究所、2016年3
月、61～90 頁
堀雅通 (2017) 「『館主巡回日記』 にみる井上円了の観光行動」 『大学院紀要』 第
53集、東洋大学大学院国際地域学研究所、2017年3月、75～101 頁
堀雅通 (2018) 「『南船北馬集 第一編』 にみる井上円了の観光行動」 『大学院紀
要』 第54集、東洋大学大学院国際地域学研究所、2018年3月、39～60
頁
三浦節夫・豊田徳子 (1992) 「井上甬水『漫遊記』 について」 『井上円了センター
年報』 Vol. 1、(東洋大学) 井上円了記念学術センター、1992年3月、
130～131 頁
三浦節夫 (2008) 「井上円了小伝—近代日本のロマンチスト」 新田・長谷川・中
村 (2008) 337～356
三浦節夫 (2014) 『新潟県人物小伝 井上円了』 新潟日報事業社
三浦節夫 (2016) 『井上円了一日本近代の先駆者の生涯と思想』 教育評論社